

- ① トヨは二十七才になった。
- ② これまでのトヨは受動的、器械的な人物であった。
- ③ トヨは大学の自由なムードの中で自我に目覚めた。
- ④ トヨは自分の職業適性は、政治家にも外交官にも向いていないと思った。
- ⑤ 母はトヨをウォーキング・テイクシヨナリーにしようとしていた。
- ⑥ 官長はトヨをWALKING-ROPPOUにしようとしていた。
- ⑦ トヨは母親に対して大口をたたくようになった。
- ⑧ トヨは政治学や経済学に興味を持つようになった。
- ⑨ 官長は独立した思想を持ったトヨを喜ばなかった。
- ⑩ トヨの当時の地位は安定していた。
- ⑪ 留学生仲間は、トヨを尊敬したりほめたりした。
- ⑫ それには理由がなかった。
- ⑬ トヨは留学生と麦酒を飲んだり麻雀をしたりしなかった。
- ⑭ トヨは物が触れば避けようとする大胆な人物だった。
- ⑮ 年長者の教えを守り、学問の道に進み、役所に勤めたのも、すべて嘘の自分であった。
- ⑯ トヨは故郷を出る時、自分は有能で我慢強い人物だと、自信満々だった。
- ⑰ トヨが神戸の港を出る時に笑っていたのは、トヨの本性である。
- ⑱ トヨはこの本性は姉の手で育てられたから生じたと思っている。
- ⑲ ドイツの売春婦や道楽者と遊ばなかったのは、金がなかったからである。
- ⑳ 留学生仲間と遊ばなかったことが、今後無実の罪で苦しみを体験する原因になる。